

# 越中万葉

6



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年（七四六年）から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなごかる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのびります。



富山県氷見市・阿尾城址に立つ歌碑

この写真は著作権の関係で表示できません。  
写真は冊子でごらんになることができます。  
担当の営業までお問い合わせください。

英遠の浦に

寄する白波

いや増しに

あやさふみかもし

あやさふみかもし

揮毫 中尾 哲雄

英遠の浦に 寄する白波 いや増しに  
立ちしき寄せ来 あゆをいたみかも

大伴家持（巻十八・四〇九三）

【歌意】阿尾の浦にうち寄せ来る白波は、ますます高く、  
立ちはしきりに寄せて来る。  
東からのあいの風が強いからであるうか。

## 《解説》

富山県氷見市は、能登半島の付け根に位置し、春から夏には東の沖からの「あいの風」が吹いています。鯨の代名詞「寒鯨」に代表される、海の幸に恵まれた土地です。三千メートル級の山々からの日の出を、富山湾越しに見ることが出来る絶景ポイントです。  
氷見市北側の断崖は、英遠の浦（あおのうら）と呼ばれていました。写真の岬には、阿尾城址があり、氷見市制30周年を記念してここに歌碑が建てられました。  
越中国守として赴任した家持は、英遠の浦のほかにも、布勢の海水、比美の江、多胡の浦、松田江の長浜などの傑作を詠んでいます。  
氷見市内には、18の万葉歌碑が建てられています。